

最新ウイルステクノロジー (4)

ウイルスを改変するツールは「パッカー」などと呼ばれています。一般的に「パッカー」は文字通り「パック（圧縮）」するためのソフトで、ファイルを圧縮してサイズを小さくすることなどが目的のものを言うのですが、ウイルスの世界（というのも変な表現かもしれませんが）ではウイルスの改変ツールを指すことがほとんどです。ではどうしてウイルスの改変ツールが「パッカー」なのかですが、これは作ったウイルスを一般的な圧縮ソフトを利用（もちろん多少カスタマイズして）して圧縮することによって見かけ改変したことによるためのようです。このように以前は一般的なパッカーをカスタマイズしたものを利用して使われていたのですが、近頃はウイルスを改変するためだけに作られた「パッカー」が増えてきているようです。このように専用に作られた「パッカー」は、ウイルスの挙動は変えずにプログラムの中身（プログラムコード）を圧縮して改変し、ウイルス対策ソフトを回避できるようにすることができるようになっています。このときさらに解析されないように暗号化したり、実験環境を検出したりする機能を追加することができます。このような機能は「アンチデバッキング」と呼ばれ、簡単なウイルスであっても、このようなツールで改変することにより、検出を回避する工夫が自動的に追加されることとなります。このような機能を持つものがツールとして存在する限りウイルスの新種や亜種が出現し続けることとなります。

ウイルスもパソコン創世記からありますがいろいろな変化をしてきたものです。初期のウイルスは今のようメールで感染するという物ではありませんでした。それはメール自体が一般的なものでなかったためと、もちろんその当時はパソコンが単体で使用するものがほとんどで、ようやくパソコン通信がマニア（といってしまっているのかもしれませんが）始まった頃からあります。その当時のウイルスはファイルに感染するタイプのものがほとんどで、媒体はプログラムやデータをやり取りするFDが中心でした。大体この当時のパソコンは各メーカーごとにシステムが独自であったため、MS-DOSなどのように標準的なOSが登場するまでウイルスもあつたかどうかになります。それに初期のものは悪さをするというよりも面白い「愉快犯」的なものが始まりで、感染することによって画面上に花火が表示されたり、作成者からのメッセージの表示されるもの、画面を崩していくものが中心でした。もちろん初期のウイルス作成者にはパソコンを攻撃しようとする意識はあまりなかったようですが、プログラムの作り方が不十分であったために結果的にパソコンを攻撃したものもあつたようです。ウイルスがファイルに感染としましたがパソコンにそのFDを入れることによってパソコン自体が感染し、それ以降使ったFDが全て感染するといったことになりました。このように始まったウイルスもいつの間にか「愉快犯」から「確信犯」に作成者も変化し、1つの産業（産業というのは表現が不適当かもしれませんが）となるかとしています。仕事となれば作り方も変わってくるのはしょうがないことなのかもしれません。コンピュータのいわば闇の部分なのかもしれませんが、あまり一般的に公表されることなくその業界ではよりいっそう高性能で巧妙なものが登場してくるのでしょう。これまでと違うのはこれまでは限られた世界（例えば国内だけなど）について対処を考えればよかったものが必然的にグローバル化したものに対処していかなければならないということです。いつまでも自分だけは大丈夫と思っていると世界中から攻撃されるかもしれません。

(連載終了)

(今週の情報誌から)

○日経エレクトロニクス 6月2日号

特集 タッチが起こす入力革新

→ユーザインターフェースとしてタッチセンサが民生機器（携帯電話やデジカメなど）に組み込まれてきた。タッチセンサはこれまでに無かったツールになりうる。センサ技術もこれまでのような光学式、静電容量式に加え、振動や視線など多岐にわたっている。

○日経パソコン 5月26日号

特集 パソコンマナー2008

→パソコンを使っているといろいろいらいらすることがある。それを解決するヒントとして、件名には大まかに内容がわかるように、添付ファイルは容量も含めTPOを考えなどなど。